三菱 九六式4号艦上戦闘機	*ニチモ　1/70スケールプラスチックキット* 製作・文：政府開発援助

1. 九六式艦上戦闘機について

海軍九六式艦上戦闘機は、欧米より明らかに立ち遅れていた日本の航空技術を一躍世界のトップレベルに引き上げた機体として知られる。昭和9年に発注され昭和11年に正式採用、わずか600馬力の発動機（三菱「寿」）でありながら沈頭鋲をはじめとする徹底した空力洗練により最大速度約*450km/h*をマークするとともに、軽快な運動性を武器に主に中国戦線で敵機を圧倒した。

九六式4号は最終生産型に当たり、約1000機生産された九六艦戦の大部分がこのタイプである。

2. キットについて

九六艦戦は長い間キットに恵まれずニチモのこのキットが殆ど唯一という状態でしたが、それはこのキットが良く出来ていたからだともっぱらの評判でした。精緻な凹モールドや可動する補助翼等、今でも魅力的なキットです。最後に生産された時には同シリーズの雷電とセットになっていました。ニチモの模型部門撤退により今後は入手が難しくなると思われます。

3. 製作と塗装について

まだ学生の頃に購入し途中まで組み立てたところで組立説明書を紛失して放置状態になっていたのを思い出し、ネットで情報を集めて組み立てを再開しました。キャノピー位置が前に寄っていると感じられたので後方に移動して操縦席周辺を整形するとともにコクピット内部をプラ板でそれらしく新造。造形上の見せ場となるフラップは資料を基に桁の位置を変更したものの、開閉軸が上手く固定できなかったようで泣く泣く下げ状態で固定しました。固定脚のスパッツがコロ走行の為大きく切り欠かれていたので、タイヤの回転は止めてエポキシパテで隙間を埋めました。プラが軟らかく凸モールドもあったりして整形には注意が必要でした。増槽にはミクロンラインテープで凸モールドを追加しています。

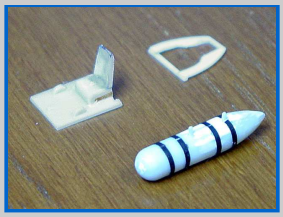
塗装は外側をラッカー系の明灰色・シャインレッド・カウリング色で、コクピット周辺とフラップ内側をラッカー系の青竹色でいずれも筆で塗り分けました。胴体側面の赤線は当初デカールで再現の予定でしたが、手持ちのものが劣化していた為こちらもマスキングして筆塗りです。機番のみMDプリンタで自作しました。スミ入れとウオッシングはタミヤのスミ入れ塗料の黒とダークブラウンを用いて派手目に行い、最後につや消しクリアーのスプレーを吹いています。

前方より

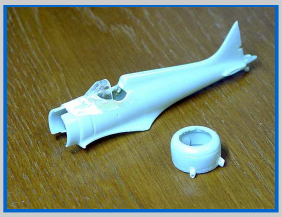
後方より

4. 途中画像

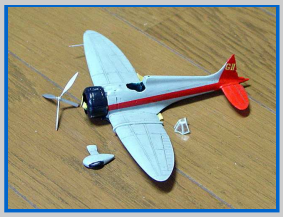
形状変更前の胴体。方向舵ははめ込み式。



操縦席をそれらしく新造。増槽にはラインテープを巻いてモールド追加。



キャノピーを後退させ、カウリング下端の排気管の角度を変更。



機体側面の赤帯は塗装で再現している。